

ローマ人への手紙1章20-21節 「聖書を知らない人の罪」

1A 被造物に明らかにされた神 20

1B 永遠の力と神性

2B 弁解のない明らかなさ

2A 暗くなる心 21

1B 神を神としない頑なさ

2B 感謝しない心

3B 虚しくなる思い

4B 鈍い心

本文

ローマ人への手紙 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びはローマ人への手紙に入っています。前回は、1 章の前半、1 節から 17 節までを見ました。今日は、午後礼拝に 18 節から 32 節までを一節ずつ見ていきますが、今朝は、20-21 節に注目します。「²⁰ 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。²¹ 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」

1 章の後半、18 節から 32 節は、私にとってはとても大事な言葉がたくさん書いてあります。それは、パウロが、真理を阻んで不敬虔と不義の中に生きている人々の始まりとして、ユダヤ人ではない人々、異邦人、異教徒の不義と不敬虔から語っているからです。つまり、聖書の知識を持っておらず、神のことばにある倫理観を持っていない人々であります。私が日本人のキリスト者として、どうやって生きればよいのかを悩みます。圧倒的にキリストを信じてない人々に囲まれて、また自分自身が以前は、仏教や神道の文化や伝統の中で生きてきたものですから、その中で、まことの神とまことの主であるイエス・キリストをどのようにしてあがめていけばよいのか、悩んできました。

信仰を持つ時は、自分自身が、英語が好きだったので、宣教師や欧米のクリスチャンとの接触がありました。その人たちは冠婚葬祭で、神社や仏教のしきたりに関わる心配は全くありません。そしてアメリカの教会で、聖書を学び、信仰について学びました。ますます、キリスト教圏の人々がうらやましくなりました。けれども、次第に日本が好きになって行ったのです。他の国に宣教の働きをして、その国も好きになりましたが、神がいかに日本を愛してくださっているのかを知り、日本のあり方をそのまま受け入れるようになれたのです。今は、むしろ、聖書を知的には知らないけれども、日本を含む欧米ではない人々のほうが、聖書の中に生きる人々の世界観に重なる部分があることに気づいています。

それは、聖書の知識がなくとも、神が自然や文化、歴史の中に与えておられる恵みがあるからです。神の与えられた自然に、神のすばらしさが明らかにされています。文化や歴史の中にも、神がそこに生きて働いておられたことを、たとえそれがキリスト教とは関係がなくとも、感じ取ることが多くなりました。そして、社会において神がいかに生きて働いておられるか、神がそのままおられるのかを知ることができています。これを、難しい言葉で「一般啓示」と言います。聖書は、それを読まなければ神について知ることはできない特別なものなので、「特別啓示」と呼びますが、聖書やキリスト教の世界でなくとも、一般に明らかにされている神のご性質や力です。

それと同時に、じれったくなるのです。それは、このように神に恵まれているのに、神を認めずに、あたかも自分たちの知恵や力で生きているという話しか、普通には出てこないからです。そして、様々な問題が起こります。こんなにも平和と秩序に守られているのに、自殺者は跡を絶ちません。こんなにも便利なのに、孤立や孤独の問題は世界的にも有名です。あまりにも悲しいのは、人をロボットやアニメのキャラクターなどと取り替えて、独りであることを願っていることです。葬式では、ロボットのお坊さん。アニメキャラとの結婚式を挙げたのも見たことがあります。奥さんがいるのに、若い女の子に模した人形と一緒に生活している人の話も見ました。こういった心の虚しさはどこから来ているのでしょうか？そこで、先ほど読んだ箇所が、そこにある問題を取り上げているのです。

1A 被造物に明らかにされた神 20

^{20a} 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、

1B 永遠の力と神性

パウロは、初めに、神は「目に見えない性質」を持っておられることを話しています。イエス様は、「神は霊です(ヨハ 4:24)」と言われました。霊というのは、なにか幽霊のように浮遊している存在ではなく、ここに、「はっきりと認められる」とパウロが言っているように、あまりにも明らかである、自明であるということです。人も神のかたちに造られたと聖書にはありますが、人の本質は霊です。私たちの本質が霊であることから説明すると、いかに明らかであるかを知ることができると思います。明石清正はどこにいるのでしょうか？ここのでしょうか？けれども、私が両腕を失ったら、どこにいるのでしょうか？足を失ったら、いかがでしょうか？頭と上半身だけで、下を失ったらどこにいるのでしょうか？そうやって考えていくと、肉体そのものに明石清正が存在しているのではないことが分かります。私は、死んだばかりの祖母の姿を若い時に見ました。五体満足でしたが、もうそこには僕のおばあちゃんはいないと、はっきり分かりました。霊は神のところに帰り、体は塵に帰ることが伝道者の書にありますが、霊が体になれば、そこにおばあちゃんはいないのです。つまり、生きているというのは、その本質は霊なのです。そして肉体は霊を表現する器であることが分かります。

つまり、本質は目に見えないところにあります。そして、「神の永遠の力と神性」とパウロが言って

いますね。神という言葉は、日本語では元々、神道で使われていたものです。私が、神道の信者さんと話したことがあって、自分の信じている福音を説明しようと思いました。すると、彼女が「神さま」という時に、初めてそっちのほうがしっくりくる、日本語の言葉として合っていると感じました。元々、神道の言葉だからです。

神道において神が祀られているので、山々の中、緑が奥深い中にあったりします。また、山の頂上に鳥居がありますね。初日の出を見れば、それに手を合わせます。なぜならば、そこに何か神々しさを感じるからです。人間の力や知恵ではどうにもできない驚異と力を感じるからでしょう。パウロの語っているのは、さらにその先に行くものなのです。つまり自然を見れば、その被造物に霊が宿っているとかではなくて、それを超えた存在、それらを造られた存在がいる、ということです。

それがここで言っている、「**神の永遠の力と神性**」であります。人は、なにか自分たちで把握して、特定して、限定しがります。けれども、まことの神は、むしろ理解を超えます。人間の能力をはるかに超えます。時空を超えています。けれども、すべてのところにいてくださるのです。こんな説明を受けました。ある宣教師さんが、限定される神とそうではない神の違いを説明しました。ちょうど、みかんがテーブルの上にあったので、みかんを使いました。「神がこのみかんの中にいると信じる。それとも、このみかんを造られた神がおられて、ここにもおられる。」造られた方がおられて、その方が造られたものと共にいるということです。

ところで、私が先ほど、キリスト教圏の人たちがうらやましかったと言いましたが、欧米の人たちの発言を聞いていると、どうもキリスト教との違うのではないか？と思うことがあります。彼らは、「それは神が引き起こしたのか？だったら、そんな神はいない」と言って、無神論になる人たちが多いです。神がいらないなら、神を憎めないだろうに・・・と思います。けれども、私たち西欧の人たちでない者たちは、悪いことが起こると、「神さまから罰が当たった」と考えますね。悪いことが起こっても、それでも、神さまの存在は信じているのです。

キリスト教はそのどちらでもありません。私たちに到底、理解できないことを神はお許しになられます。全知全能で、主権者であられます。しかし、神は同時に、その理不尽なところに共におられるのです。その痛みや悩み、苦しみと共におられます。慰めと慈しみに満ちています。人と一つになったださいます。その神がご自身の全てを表すべく、ご自分の御子を、肉体をもってこの世に現しました。そして十字架の死に引き渡したのです。イエス様の十字架は、神が理不尽をお許しになる方であることを示すと同時に、その理不尽なことの中に共にいることを表しているのです。

そして、「**世界が創造されたときから被造物を通して知られ**」とあります。聖書の冒頭は、「はじめに神が天と地を創造された。」であります。この言葉を聞かずとも、被造物に明らかにされている創造した存在の力や神性は明らかです。自然科学の一流の学者の多くに、神を信じる人々

が多いものその一つです。今の自然科学は、大学の神学部から生まれました。そして初期の科学者の殆どが、神への信仰があり、この自然がこれほど秩序をもって造られているのは、神がおられるからに違いないとして研究したのです。ケプラー、ガリレオ、ニュートンなどなど、みな熱心な信仰者でした。優れた科学者ほど、科学は自然のメカニズムがどうなっているかを説明しているが、なぜそうなっているのかは説明できないことをよく知っています。雪の結晶が、あれほど幾何学的な美しさを持っていて、どれ一つとして同じものはないことは知ることができていますが、なぜそうなっているかは分かりません。

人間の世界で、形あるもの、精工なものは、すべて造られたものであると認識します。料理もそうだし、皆さんの手にするスマホ。どれもこれも、人の知恵が入った、造られたものです。なのに、自然界でそのようなあまりもの正確な法則や規則を持った秩序があるのを、偶然にできたと言ったら非論理的です。しばしば、このような皮肉があります。「無神論者になるには、相当の信仰が必要だ。」神はいないと熱心に信じないと、無神論者になりえない、ということですよ。

私は、信仰をもってから、心が明るくされたことがあります。今、生きている世界がみな新しくされたような気持ちになったことがあります。旅に出て、田舎に行き、田んぼの背後にある山を見ます。日本昔話物語に出てきそうな山です。それを見た時、以前なら、山の神さまと教えられたから、それが神さまなのか？と思いつもうとしました。けれども、何の声も聞こえません。生きているように思えません。しかしクリスチャンになって、この山が神によって造られた。創造した方がおられて、この山をも造られたと知った時に、一気に視界が広がったのです。喜びが、心の解放が与えられました。そこに神の栄光が見えるのです。創造の神の声、聞こえたのです。

詩篇の著者が、このことを語っています。「19:1-6 天は神の栄光を語り告げ大空は御手のわざを告げ知らせる。2 昼は昼へ話を伝え夜は夜へ知識を示す。3 話しもせず語りもせずその声も聞こえない。4 しかしその光芒は全地にそのことばは世界の果てまで届いた。神は天に太陽のために幕屋を設けられた。5 花婿のように太陽は部屋から出て勇士のように走路を喜び走る。6 天の果てからそれは昇り天の果てまでそれは巡る。その熱から隠れ得るものは何もない。」今は、太陽の道は黄道というのでしょうか、その精密さはものすごいものですが、それを見ていると、物理的に声は聞こえないものの、このようなあまりにも精緻な、規則的な運行が、偶然に起こっているはずがない、はっきりと神がおられることを教えてくれます。だから、そこに神の栄光が語り告げられているのです。

2B 弁解のない明らかさ

そして、パウロは「^{20b} 彼らに弁解の余地はありません。」と言います。あまりにも明らかであるから、弁解の余地はないということです。私は神を知らなかったとは言わせない、言えないということですよ。「詩 14: 1 愚か者は心の中で「神はいない」と言う。」とありますが、これは無神論が愚かだと

言っているのではなく、あまりにも明らかなのに、それを拒んでいる頑なさが愚かだということです。

今、私たちは息をしています。心臓が動いています。24 時間、一切、休むことなく、一生涯行われています。どんな機械でも、休ませなかったらすぐに故障しますが、人間の体は、それを何十年も維持しています。自分でできていないことは、無数にあり、自分の力、自分の知恵でできないことはあまりにもたくさんあります。もちろん、努力して生きていきました。しかし、自分の努力なんて、全く自分ではどうしようもない、けれどもこうやって生かされていることに比べたら、糸くずのようなものです。しかし、多くの人が「私は自分を信じている」というのです。

バビロンの国で最後の王、ベルシャツアルがいます。彼は、大宴会を開いて、エルサレムの神殿から持ってきた器を使って、ぶどう酒を注いで、人々に酒を飲ませ、そして自分は、神々を賛美しました。バビロンの神々です。言い換えれば、「天地を造られた神などいない、おれはバビロンの王だ。おれの力と威光によってこのバビロンがあるのだ。」と言っているようなものです。けれども、壁に人の指が表れて、なにかを書いていた。ベルシャツアルは恐怖に包まれ、この文字の解き明かしをしると命じますが、だれもいません。ところが、ダニエルができることを知りました。ダニエルが呼ばれました。そしてダニエルが、その文字の解き明かしを伝える前に、こう告げるのです。「ダニ 5:23 それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」自分が、「天の神などいない」と吐き捨てた、その息ですが、その息も神から与えられているのに、神を神と認めないで、他の、生きていない神々を賛美したということです。「神なんかいねえ、ばかじゃないの?」と言っているその息は、神によって造られているとう、皮肉です。あまりにも明らかで、弁解の余地がないのです。

2A 暗くなる心 21

罪というのは、どこから来るのか？これは、盗みとか淫乱とか、道徳的なことから来る以前に、神を神としてみなさない、その高ぶりから来ています。「²¹ 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」ここに段階があります。

1B 神を神としない頑なさ

第一の段階は、「神を知っていながら、神を神としてあがめず」とあります。神はいないとしているのは、知的に困難を覚えるのではないのです。いるのは知っていながら、それを神だとしていないという心の頑なさが問題であります。しばしば罪というと、嘘をつくとか、怒り散らす、不倫をする、そういった道徳的なもの、あるいは法を犯す犯罪とみなされます。けれども、自分の生活の中に神

がおられることを認めないというところに根本の問題があり、その高ぶりが罪の始まりです。これは、多くの場合、無意識で行われます。神がおられるというところに立ち返らず、いろいろな問題が起こっている時に自分で対処しようとする。祈らない。願い求めない。ここに神がおられると認めない。自分がきちんとできていないことが問題ではなく、むしろ「きちんとできていない」と悩んで、神を見上げないことが、罪なのです。

2B 感謝しない心

第二の段階は、「感謝もせず」であります。例えば、私たちの目の前に、水が半分、入ったコップがあるとします。そこで、どのように感じるでしょうか？「コップに水が半分しか入っていない。」と見て、不満な思いが出て来るでしょう。あるいは、「あと半分、水が入るようにするのは、どうすればよいか？」と思うでしょう。そこに足りないのは、感謝なのです。水が全くなくても、全くおかしくないという状況を想定できないのです。それでも水が半分も入っている、と考えられないのです。そこに、神の働き、神の恵みを見ることが出来なくなっています。

2011年、10年前の今、実に日本は原発事故の大惨事に見舞われました。私は、5年間の宣教生活から日本に帰国して、まだ3か月しか経っていませんでした。電力の急激な不足のため、東京電力は計画停電を実行しました。私は、驚いたのです。その「計画停電」という言葉に。私たちのいた地域では、停電になることは日常茶飯事でした。停電というのは、突然来るものであると思っていました。しかし、停電を計画できるのだ！という感動だったのです。けれども、巷では、東電に対する非難の嵐が吹き荒れていました。私が、その感動を他の人たちに言ったら、気が狂っているとか思われなかったでしょう。

電気が自分たちの家に到達するまでに、それは空気と同じように24時間あるものだと思い込んでいて、自然に流れついているものだと思ってしまっています。いいえその反対です、24時間、365日、途絶えることなく安定供給するために、命をかけて働いている人々がいるからこそ、空気のように身近になっているのです。これと神の働きは似ています。私たちが当たり前になって、ほとんど意識しなくてもよいほど、神は生きて働いておられるのです。私たちから目を一切、話すことなく見守っておられるのです。しかし、神を神と認めず、神をあがめることをしないので、感謝の心が出てこないのです。

3B 虚しくなる思い

そして第三段階は、「その思いはむなしくなり」であります。神を神とせず、感謝がないから、その結果、当然、空虚な空間が自分の前に広がっていきます。私たちに、どれほどの虚しさがあるでしょうか。孤独が日本において非常に大きな問題です。疎外感によって、自殺する人々の数は毎年、日本では2万を下らないのです。私は、孤独になっている人々、自殺する人々がその問題があることに反対します。社会全体に、思いを虚しくする空気を私たちが作り出しているからこそ、

そういった人々が現れるといったほうが正しいからです。

日本の人々に、伝道になる聖書の箇所がありまして、文字通り「伝道者の書」です。イスラエルの王ソロモンが晩年に書き記しましたが、彼は、こう言い始めています。「1:2-3 空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。日の下でどんなに労苦しても、それが人に何の益になるだろうか。」日の下という言葉ソロモンは使い続けます。世をよく知っている人だからこそ、使える言葉です。益があると思っている人々は、まだとことんやり遂げていないからでしょう。ソロモンは、知恵が神から与えられ、非常に優れた能力を持っていました。それで、彼はまず、知恵を尽くして、物事を探り出そうとしました。学者のような知的探求です。それは実に辛いものでした。気が狂いそうになって、苛立ったようです。そこに虚しさがあると分かると、快樂に興じました。これがいかに、虚しいかも記しています。

そして彼は事業を立ち上げました。虚しくなりました。次に、財産も手に入れましたが、虚しいです。そして哲学も求めたようですが、気がおかしくなりそうになっています。そして彼はこう言っているのです。「2:17 私は生きていることを憎んだ。日の下で行われるわざは、私にとってはわざわいだからだ。」どうでしょうか？近代日本の知識人で、有名な文学者で自殺しなかった人のほうが少ないのではないかと、思います。似ていますね。そこでソロモンは、伝道者の書の最後で、こうしめくくっているのです。「12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。」

4B 鈍い心

そして第四の段階が、「その鈍い心は暗くなったのです。」であります。この暗いというのは、無感覚になったということです。道徳的にも無感覚になったということです(エペ 4:17-19)。心の欲望のままに汚れの中に入り、また無価値な思いになることです。これは 24 節以降でパウロが、列挙しています。同性愛行為を始めに取り上げます。同性愛を権利としか取り上げない傾向がマスコミにあります。同性婚を経た人々の後での離婚率は非常に高いです。そういった暗い部分は表に出てきません。悪意、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪だくみなどです。こういったことも、裏に隠されて行って、表に出さないでいます。表向きはよく見せていますが、実は大いに問題があるということがありますね。きれいに見えている時こそ、闇が深いとも言えます。

いかがでしょうか、これが罪の根源です。罪というと、どうしてもおおっぴろげな罪や不義を思うし、自分はそれほど悪い人だと思えないとなりますが、もっともって根源的なものです。そこから、自分は罪人なのだ気づき、そしてイエスが、昼間なのに真っ暗になった下で、十字架上で息を引き取られたのです。そこに神があるのです。闇のど真ん中に入って来られました。